

戦争の危険とどうたたかうか

わがハーグ代表団の任務の問題についての覚え書

ハーグ会議に関連して、戦争の危険とたたかうという問題では、最大の困難は、この問題が単純で、明瞭でかつ比較的容易である、という先入見を克服することであると私はおもう。

——ストライキまたは革命で戦争にこたえよう——改良主義者のもっとも有名な指導者はみな、労働者階級にむかってそう言うのが例である。そして、非常にしばしば、こうした答えの見かけのうへの急進性が、労働者や協同組合員や農民を満足させ、安心させている。

おそらく、もっとも正しいやり方は、このような意見をもっと手きびしく論破することから、はじめることにある。すなわち、最近に戦争があったいましてはとくに、戦争反対闘争の問題にこうこたえることが、なにかの役にたつなどと保証することができるのは、最大のばかものか、それともどうにもしようのないうそつきだけである、と声明することであろう。それは、革命で戦争に「こたえる」ことが、もっとも単純な、文字どおりの意味で不可能であるのとまさにおなじように、ストライキで戦争に「こたえる」ことはできないと、声明することであろう。

戦争の生まれてくる秘密がどんなに大きなものであるか、革命的組織と自称していても、労働者の普通の組織では、実際にさしせまっている戦争に当面しては、どんなに無力なものであるかということ、この実情を、人々に説明しなければならない。

最近の戦争のときの状態はどうであったか、なぜそうでしかありえなかったか、ということ、くりかえしくりかえし、もっとも具体的に人々に説明しなければならない。

ことに、「祖国擁護」が避けられない問題となって、勤労者の圧倒的多数がこの問題をブルジョアジーに有利に解決するであろうという事情の意義を説明しなければならない。

だから、第一に、「祖国擁護」の問題の解明、第二に、それに関連して「敗戦主義」の問題の解明、最後に、戦争反対闘争のただ一つ可能な仕方の解明、すなわち、戦争に参加するすべての革命家の長期にわたる戦争反対活動のための非合法組織の維持と結成ということ——すべてこうしたことに重きをおかなければならない。

戦争ボイコットとは愚かな空文句である。共産主義者はどんな反動的な戦争にも参加しなければならない。

戦前のドイツの文献なりを例にして、ことに 1912 年のバーゼル大会を例にして、つぎのことをとくに具体的にしめすことがのぞましい。すなわち、戦争が罪悪であり、戦争が社会主義者にとってゆるしがたい等々ということ、これを理論的にみとめたところで、問題をこのようにたてることには、すこしも具体性がないから、それは意味のない空文句であるということである。戦争が近づくかもしれず、また近づくであろうということについて、われわれは真に生きいきとした観念を、すこしも大衆にあたえていない。反対に、有力新聞は毎日毎日無数の部数を発行して、この問題をかくし、弱い社会主義新聞にはまったく手の出ないほどのうそをこの問題についてひろめている。社会主義新聞は、平時でもこの問題について根本的にまちがった見解をもっているだけになおさらのことである。大多数の国の共産主義新聞もきつとおなじように恥をさらすことであろう。

協同組合員および労働組合員の国際会議に出るわが代表は、たがいに任務を分担し、現在、戦争を是認する道具につかわれているすべての詭弁を、このうえなく詳細に検討すべきであろう、と私はおもう。

おそらく大衆を戦争に引き入れるもっとも主要な手段は、ブルジョア新聞があやつっている詭弁であろう。そして、われわれが戦争にたいして無力なことを説明するもっとも主要な事情は、われわれがこれらの詭弁をまえもって検討しないでいること、それにもまして、われわれは 1912 年のバーゼル宣言の精神にもとづいて、戦争をゆるさないとか、戦争の罪悪をよく理解しているなどという、やすっぽく高慢で、まったく意味のない空文句でこれらの詭弁をかたづけていることである。

もし、われわれが、ハーグ会議にあれこれの国語で戦争反対演説のできる人を数名だすことができるなら、もっとも重要になるのは、出席者は戦争反対者であるとか、戦争はもっとも思いがけない瞬間に彼らをめがけて近づいてくるかもしれないし、近づいてくるにちがいないということ、出席者は理解しているとか、彼らが戦争反対闘争の仕方をいくらかわきまえているとか、彼らが戦争反対のための賢明な、目的をはたすことのできる方法をとることがいくらかできるとかいう、こうした意見を論破することであろうとおもわれる。

このまえの戦争の経験を考慮して、宣戦布告のもう翌日にどんなに多くの理論上の問題や生活上の問題が、起きてくるかということ、そしてまた大多数の応召者がこの問題にたいしていくらかでも明晰な頭で、いくらかでも偏見なく良心的な態度をとる可能性をことごとくなくしてしまうものだということ、説明しなければならない。

私は、この問題を、なみなみならず詳細に、しかもそれを二通りに説明しなければならないとおもう。

第一に、このまえの戦争中にあったことを話してそれを分析すること、そしてすべての出席者にたいして、彼らはそれを知っていないか、あるいは知ったふりをしていても、実際には、それを知らないことにはどのような戦争反対も問題にならないといった、問題の真の要点がどこにあるかという点には目をつむっていると説明することによってである。この点については、その当時ロシア社会主義者のあいだに出てきたすべての色合い、すべての意見を検討することが必要だ、と考える。これらの色合いは偶然に出てきたのではなくて、一般にこんにちの戦争の本性そのものから生まれるものであるということを証明しなければならない。これらの意見を分析することなしには、また、これらの意見はどのようにして不可避免的に発生してくるのか、どうしてこれらの意見は戦争反対闘争の問題にとって決定的な意義をもっているのか、ということ、これを解明することなしには、——このような分析なしには、戦争にたいするどんな用意も、まして戦争にたいする自覚した態度などということ、問題にもなりえないことを証明しなければならない。

第二に、どんな些細なものであろうとも、現在のいろいろな紛争の例を取りあげ、その例にもとづいて、戦争というものは、トルコとの条約のある細部についてのイギリスとフランスとの論争からも、あるいはアメリカと日本のあいだで任意の太平洋問題についてのつまらない意見の不一致からも、あるいは任意の大国間で植民地問題の論争またはその関税政策、一般に通商政策にかんする論争などからも、いつなんどきおこるかかわからないことを、説明しなければならない。もし、ハーグで戦争反対の演説を全部完全に自由に述べ

ることができるかどうか、すこしでも疑いがあれば、一連の巧妙な手をつかって、主要なことだけなりと話しておき、言いつくせなかったことはあとで小冊子にして出版するようすべきである、とおもわれる。議長の制止を受けるまでやらなければならない。

この目的のためには、戦争反対の演説を全面的に述べる、すなわち、戦争反対のあらゆる主要な論拠やあらゆる条件を展開して述べる能力と義務をもつ演説者のほかに、——さらに、三つの主要な外国語をみなあやつれるものも、代表団にくわえなければならないとおもう。彼らは方々の代表者と話し合い、代表者たちが根本的な論拠をどれくらい理解しているか、しかしかの論証をあげることがどれほど必要か、あるいはどの例を引くことが必要か、ということをつまららかにする仕事にあたるのである。

一連の問題については、このまえの戦争の実例をあげるだけで、重大な影響をあたえることができるかもしれない。別の一連の問題については、国家間に現在おこっている紛争や、またこれらの紛争とおこりうべき武力衝突との関連を説明したばあいはじめて、重大な影響をあたえることができるかもしれない。

戦争反対の問題については、わが共産党代議士が、各国の議会でも、また議会外の演説のなかでもおこなったおびただしい声明があり、しかも戦争反対の闘争について法外にまちがった、法外に軽率な考えをふくんでいるような声明があることをおぼえている。このような声明にたいしては、とりわけそれがすでに戦後になってからなされたばあいは、そのような演説者の名まえをいちいちあげて、これに断固として容赦なく反対しなければならない、と考える。このような演説者についての批評はどんなにでもやわらげてさしつかえないし、そうすることが必要なときはとくにそうであるが、しかし、このようなばあいを、けっして、だまって見すごしてはならない。なぜなら、この問題にたいする軽率な態度は、ほかのどんなことにもまさる害悪であって、この害悪を大目にみることは絶対にできないからである。

見のがすことのできないほど愚劣で軽率な労働者大会の一連の決議がある。

すぐにもありとあらゆる資料をあつめて、このテーマの大小を問わずあらゆる個々の部分と大会の全「戦略」とを、詳細に検討しなければならない。

このような問題については、われわれが誤りをおかすことはもちろんのこと、重大な不十分さがあっても、それはゆるせないであろう。

1922年12月4日

1924年4月26日、新聞「プラウダ」第96号にはじめて印刷

署名——レーニン

第33巻『わがハーグ代表団の任務の問題についての覚え書』全文P466～470

※ハーグの国際平和大会（事項訳注 P539）

1922年12月10－15日にひらかれた。これは、労働者大衆の圧力を受けたアムステルダム・インタナショナルによって召集されたもので、新しい世界戦争の危険とたたかうことを目的としていた。招請を受けて大会に出席したソヴェト代表団は、戦争にたいするプロレタリアートの任務について述べた。しかし日和見主義者が多数を占める大会は、ソヴェト代表団の提案した行動綱領を否決した。

コメント

「こんにちの戦争の本性」を暴露もせず、「ストライキまたは革命で戦争にこたえよ

う」という左翼的な言葉と「戦争を是認する道具につかわれているすべての詭弁」を暴露することなしに言う「たしかな野党、九条を守れ」という言葉とは、同じように無意味である。